

念佛往生の教義の發達

文學博士 望 月 信 亨

淨土教の問題も種々ありますが、其中此念佛往生といふことが最も通俗に能くいはれて居ることであり、且淨土教は實行を重んずる、宗教は無論實行を重んじますけれども、淨土教は殊に實行を重んずるのであるから、往生の教義に就て少しお話を致さうといふ考へをしましたことでもあります。實は先日來少々公私多忙で、爲に十分な腹案を作るといふことが出来ませぬので、洵に申し上げますことが統一のないやうなことに自然ならうと思ひます。其點は豫め御了承が願ひたいのであります。

念佛といふことは普通に口で南無阿彌陀佛と唱へることをいふのだと考へて居りますけれども、厳格にいつて見ると口で南無阿彌陀佛と唱へるのは稱名と名けらるべきものでありまして、佛を念するといふ意味の念佛とは截然區別さるべきものであります。ところがどうしてそれが今日念佛といへば口で南無阿彌陀佛と唱ふるとであるといふ様になつたかといふと、是は法然上人の選擇集の中に「念佛是一」といふ説があつて、本願の乃至十念の文の解釋に就いてその念といふのは聲と同一の意味だといふこと

にいはれた爲に、念佛と稱名とが全然同一意味に使はれるやうになつたのであります。併しながら此の二者は實は同一ではないのでありまして、念佛といふのは佛を念ずるといふ意味で、唯頭で佛のことを憶念思惟するのであり、稱名といふのは口で佛の名を唱へるのであります。今日は簡單に念佛のことも稱名のことも共にお話をしたいと思ふのであります。其中で先づ念佛のことから述べるとにします。

念佛といふのは佛を念ずるとであります。今説明の順序として最初に念の意義を述べ、次に佛のことに就いてお話ししようと思ふのであります。念といふ字は佛敎の解釋では憶持不忘といつて記憶して忘れないといふ義に説くのであります。何事でも初めは唯々時々それを思ふといふ位のところが、段々進みますと、記憶して忘れぬといふ状態になる、その處を念といふのであります。ところが其念がもう一つ進んで來ますといふと、所謂精神統一といひますが、即ち精神が亂れない。一心不亂といふ状態になると出來る。この境地を佛敎では三昧即ち定と呼んでゐるのであります。念佛の場合に就いていつて見ると、佛を忘れず常に憶念して居る間が念佛であり、一心不亂に佛の對象から心が動かないやうになつた處を念佛三昧と名けるのであります。三昧の状態に進みますと、唯憶持して忘れぬといふ位ではなしに其の精神が亂れず、對象から心が動かないやうになるのであります。三昧、即ち定といふとは佛敎の解釋では心一境性といつて、心を一つの對象に集注してそれが少しも動かぬやうになつた所をいふのだと

説くのであります。處が此三昧といふ状態になりますと——勿論三昧の種類にも由るとでありますが、それが若しも念佛三昧であればその三昧中に見佛が出来るのであります。先年も見神見佛の議論が大分入釜しいとがありました、佛教の説ではそれが十分可能であると申すのであります、即ち三昧の状態が繼續しますと肉眼では見るとの出来ない靈境とでもいひますが、さういふものを必ず見ることが出来るといふのであります。但し見佛と申しまして、唯佛だけではなく淨土も見るのであります。即ち理想の天國、樂園も悉く見るのであります。一體心一境性といふのは亡我の状態になるらしいのであります。さうして亡我の状態になりますと、そこに朗然たる靈智が起つて来る。くわしく言つて見ますと私共の意識は日常絶えず五官を通して外界から刺激を受けてゐる、所謂見る事聞く事に就きまして精神意識が刺激されて、意識の淵が絶えず波立つてゐるのであります。(未完)

智者は聞かんが爲めに屈す(法句經多聞品)